憧れの姫路西高へ五百七名

期待される新入生

去月十七日県下一齊に行われた入学試験を通過し入学を許可された新入生は五百七名である。学区制実施後三年、茲に本校は全学年を通じて完全なる学区制の生徒が揃つたわけであり、西校の真価を問われるのは正に今後にかかつていると言わねばならぬ。ここに生徒会長の新入生歓迎の言葉と一年生諸君の入学に際しての決意を書いてもらつた。

新入生諸君へ

全校生徒会長　木村守男

入学式以来、二十日余り長い入校訓練を終えて、そろそろ学校の内外の事がわかつて来た事と思います。今迄居た中学校との差の余りの甚だしさに驚いている人もあるかもわかりません。しかし授業面に於いても、色んな活動に於いても、ようやく軌道にのつて進みかけた今、皆さんの眼前には、せねばならない事が沢山横たわつています。まず第一に中学校時代の気持を、一掃して完全な高校生としての生活に突入することでしよう。いやしくも西高生としての徽章をつけ、自ら西高生たることを誇る以上はそれ相当の努力がなければならぬことはいうまでもないことです。いたずらに西高生としての外形を保つても、内容の備わらないということは最も残念なことです。中学生が高校生の制服をつけたような形にならない様、まず皆さんの心をひきしめ高校生になりきつて欲しいと思います。

第二に生徒会の事ですが「生徒会」というのは役員の会ではなくて自分達すべての会である事を認識して下さい。その意味から先日配布された「生徒会の会則」は少なくとも大体の事位は知つておくべきです。「こんなむずかしいもの」という人もあるでしようが、よく読んでおけば、国語の教科書とは比較にならぬくらいやさしいものです。高校生としての面目にかけても読みとおして下さい。勿論、会則を幾ら読んだ所で、会則を書いた紙が、動き出すわけでもありませんから、皆さんの協力がなければなりません。入学以来くどくいいますが、積極的な関心と批判を、自分達の生徒会活動にむけて欲しいものです。その点、第一回の全校委員会に、多数の一年の傍聴者があつたのは、その一端を示すものとして、うれしい事と思います。

入部活動については、相当出入りが、はげしいようですが、一人に一ツは入るのが、各部の設立目的からいつても、個人のためにも、いいことです。一部から聞きましたが『あの部に入りたいが、きくところによると、あまりいい部ではないから入らない』という人が、中にあるそうですが、もつと考える必要があります。部をよくするか、悪くするかは、皆さんの努力一つです。好きな所に入つて、その部をよくするために（それが結局自己を磨くことなんですから）大いに努力すべきです。本校の部には、入つて悪いものは絶対にないはずです。安心して部に属することを希望します。

最後に、団体活動という事について、研究してもらいたいと思います。これは一般に秩序乱れている事の一つと思いますが、団体生活をしている者にとつては、自己中心は許されません。今度、選ばれた委員を中心に研究して欲しいと思います。色々と、いいたい事がありますが、今日は以上の事を述べ、皆さんの積極的な研究と、努力を希望して、ペンをおきます。

入學に際して

一ノ十　伊藤　徹子

入学してまず感じた事、それは上級生の方達の言葉使いが、ていねいなことです。上級の人同志の話言葉などは、入つて日の浅い私には、とうてい分りませんが、私達に対する言葉、下級生に対する言葉には、世間一般に考えられている上級生の横暴などということはみじんもなく、私達に敬愛と信頼の念を起さすに足る十分なものです。

次に感じたことは昼休みの時間の少ないことです。今までいろいろ雑談を交しながら、ゆつくり食事をおえ、後は思い思いに本を読んだり、字引を引いたりしていた私達にとつて、授業が少々長引くと食事も半分で止めなければならぬ今の状態では、本当に気ぜわしくおちつくことが出来ないので、困つています。

又この学校に入つて案外に思つたことは、文化部の活動が不活発なことです。「高校の部活動は……」等ということを常に聞かされていましたのに、活発に自主的にやつている事をうたがわねばならぬとは思いもよらない事でした。どの高校でもこの様な状態なのかも知れません。私の期待が大きすぎたのかも知れません。が、私が軽い失望の念におそわれたのは事実です。

しかし、全校を支配する燃え上る様な向上心と礼儀正しさを考えたとき、本当に良い学校へ入学出来たという喜びと、それにともなう責任の重大さを今さらの様に、感じさせられます。

上級の方々の血の出る様な努力の結果、築き上げられた名誉と地位を、傷つけない様に、いや、それ以上のものに高めるために、私達は今後大いに努力します。

美名に酔うな

一ノ二　梨岩　修五

緑地に二本の白線を浮かび上らせた高校の制帽は、いつの世になつてもやはり我々のあこがれの的の一つであるらしい。幸いにして私がその帽子を、それも天下の西高の帽子をかぶることの出来た喜びはここに述べるまでもない。が私は帽子は学校の表われの一つであるから、学校自身が我々を引きつける魅力を持つているのだと思つている。ところで或人が「西校位は遊んでいても入れる」と云うのを聞いた時、私はなんとも云えない気がした。我々はここを強く反省すべきではないかと思う。成程西校に入ることは容易であるかもしれないが、それではその人はただ入学さえすれば、以後はどんな行動をとつてもその学校の誇りを持つことが出来ると云うのだろうか。

私がただ云いたいことは、我々が学校の地位と誇りを保つことの出来るのは、西校の生徒たる責任を持つことによつて初めて導き出されてくる結論であるということである。東京、仙台等の人々は姫山公園の桜と云えば、その全盛時代を想像するそうである。世の中には此の様に名のみを以つて表看板となつている所が多くある。私のいわんとするところは、実をもつて名を作ることである。それには学校では一にも二にも生徒の自覚に依るものである。

私はこの様に考えてこの様に導き出した結論を私の決意としたい。幸いにして我々は良き先生方の指導を受け、良き先輩を持ち、良き学校設備を持ち又自然環境に恵まれている。私は勉強に運動に又生[illegible]かしたいと思う。何[illegible]々は常に[illegible]向つて伸び切らんとする「若竹」の如くありたいと思う。いやそうでなければならない。